

防災・減災のページ

毎月11日掲載

第85回ワークショップ @宮城・七ヶ浜

むすび塾

6人は語り合いに先立ち、10以上の津波が襲来した同町の葛浦田浜と花刈浜を訪ねた。同町在住で地元で育ち、現在、宮城で被災者支援の活動をする「Fプロジェクト」に参加した紀野国七海さん(16)と多賀城高1年、小野寺美羽さん(16)と仙台南高1年が被災当時の状況を説明した。

参加者は視察後、震災後に建てられた笹山地区避難所で語り合いに臨んだ。

震災犠牲者を追悼するキャンパス・ドールの実行委員を務める、仙台南の仙台南高等学校教育学校5年鈴木涉悟さん(17)は「沿岸被災地を訪れたのは今回が初めて。同じ宮城県内でも自分が住んでいる仙台南内陸部の被災は大きな違いがある。まだまだ震災を知らないと感じた」と打ち明けた。

同じく沿岸被災地を初めて訪れた栗原市の築館高3年二階堂和奏さん(17)は災害支援に取り組み同校の「一人のためプロジェクト委員会」の活動を紹介しながら「内陸で震災が話題になることは少ない。(2008年の)岩手・宮城内陸地震の被災

震災伝承担う決意新た



震災を伝えていく意義などについて語り合う参加者
12月16日、宮城県七ヶ浜町の笹山地区避難所

地でもあるのに内陸地震が語られることもない。被災者の話を聞く機会を増やしていく必要がある」と危機感を募らせた。

震災の風化を懸念する声は他参加者からも続いた。

教員を目指しているという紀野国七海さんは「教員になって子どもたちに震災を伝えていきたい。南海トラフ巨大地震が心配されている。宮城県以外にも伝えていきたい」と語った。

多賀城市の多賀城高災害科学

高校生、被災地で語り合う

河北新報社は12月16日、通算85回目の防災・減災ワークショップ「むすび塾」を宮城県七ヶ浜町で開いた。東日本大震災の語り部活動や復興支援に取り組む県内の高校生6人が参加し、自分たちの取り組みを紹介するとともに震災伝承の今後に向けて課題を話し合い、震災を未来へ語り継いでいく決意を新たに誓った。

むすび塾に参加して



●風化防止伝える 震災を経験したことで、教師になって下の世代に教訓を伝えることが自身の目標になった。それまでの間も風化を防ぐために伝え続けたい。仲間と一緒に幼稚園児向けに震災の紙芝居作りを進め、被災者との交流会で話を聞いて学んでいる。同世代や県外の人にも防災や備えの大切さを広く伝えたい

●多賀城高1年・紀野国七海さん(16)



●震災と向き合う 震災で母を亡くし、祖母は今も行方が分からない。震災に一生向き合っているつもりだ。震災がどれだけの怖いものか、どうすれば身を守れるのか。子どもたちや体験していない大人たちに教えてあげれば、震災の犠牲者をもっと減らせると思う。高校生はまだ10代。若い世代だからこそできることはまだまだある

●仙台南高1年・小野寺美羽さん(16)



●仲間増やし活動 七ヶ浜町の被災状況を視察し、同じ県内でも全然違うと感じた。震災を知らないことを知った。現在3月11日に震災の犠牲者をしのぶ「キャンパス・ドール」の実行委員をしている。今の高校生は震災当時、小学2・4年生。震災を伝えられる最後の世代だ。仲間を増やし、先頭に立って活動を充実させていきたい。仙台南高等学校5年・鈴木涉悟さん(17)



●合唱曲通し交流 初めて沿岸被災地を訪れ、普段過ごす内陸地域と環境の違いに驚いた。記憶の風化が進み、災害の恐ろしさを知らない世代も増えている。被災地へ足を運び、当時の体験を聞くなど、自らの目と耳で震災を知ることが大切だ。被災者へ向けて創作した合唱曲の披露や、学校の語り部の招待など、被災地と交流する機会を創出に努めたい

●築館高3年・二階堂和奏さん(17)

宮城・七ヶ浜



カフェ併設の宿泊施設「シノリゾート」屋上の避難デッキで津波被害について話し合う参加者。12月16日、宮城県七ヶ浜町の花刈浜



視察後、津波犠牲者を追悼する慰霊碑に手を合わせる参加者。12月16日、宮城県七ヶ浜町の花刈浜



●震災伝承は責務 震災を経て、被災地の役に立ちたいという思いを持つようになった。樹木再生活動や体験の語り継ぎなど、若者が復興や伝承に携わる方法はある。高学年の目標から震災を捉え、幅広い年齢層に伝えていくことが自分たちの役割ではないか。震災に関心を持つ学生が増えるよう、学校単位でそれぞれの思いを話し合うことから始めたい

●宮城県高2年・山口晋人さん(16)



●小中学生に発信 在籍する災害科学科や生徒会の取り組みで震災伝承活動をしているが、今回視察した七ヶ浜町のようないまの沿岸部の被災はあまり知らなかった。もっと被災地を訪れ、被災者の体験に耳を傾けて、学びを深めたい。自分たち高校生が連携して活動していくことで、より若い小中学生の世代に伝えていくこともできるだろう

●多賀城高2年・宇佐美直輝さん(17)

Fプロジェクト

向洋中学生が結成、卒業生も活動

学習契機に復興支援

プロジェクトでは、災害月に住民交流会を企画、合公営住宅の住民交流会企画や震災体験の語り部活動など、地域での活動を行っている。

Fプロジェクトは15年、地元七ヶ浜町の震災に向き合うことを目的とした震災学習を設けたのが結成のきっかけとなった。生徒は震災時の行動を振り返り、作文にまとめ、自身の被災体験を改めて捉え直したほか、町内外の被災者にも話を聞き、結果を発表し合う学習にも取り組んだ。

一連の学習を経て生徒たちの間に「町の復興のために何かしたい」との声が高まり、有志が16年3月にFプロジェクトを結成した。Fは百里復興、フューチャー(未来)の頭文字を取った。



宮城県七ヶ浜町の向洋中生活者志をつくる地域活動団体「Fプロジェクト」は、同中の震災学習を機に2016年に結成され、東日本大震災の伝承と地域復興に意欲的に取り組む。高校に進学した卒業生が別団体を新たに結成するなど、活発な活動が続いている。

Fプロジェクトは15年、地元七ヶ浜町の震災に向き合うことを目的とした震災学習を設けたのが結成のきっかけとなった。生徒は震災時の行動を振り返り、作文にまとめ、自身の被災体験を改めて捉え直したほか、町内外の被災者にも話を聞き、結果を発表し合う学習にも取り組んだ。

一連の学習を経て生徒たちの間に「町の復興のために何かしたい」との声が高まり、有志が16年3月にFプロジェクトを結成した。Fは百里復興、フューチャー(未来)の頭文字を取った。

想像し言葉のリレーを

宮城教育大准教授 小田隆史さん(40)



東日本大震災と向き合う高校生同士で語り合うことで、大人たちから話を聞くのは違う学びがあったろう。自身で受け止めた経験を今後、どのようにリレーしていくかが重要になる。

米国では第2次世界大戦中の強制収容について、収容された日系米国人の子孫たちが強制収容の歴史を語り継いでいるという事例もある。戦争と震災を同列に扱うことはできないが、当事者でなくても、若い世代が犠牲を繰り返さないという思いを自分たちの言葉でリレーしているという。

震災から7年以上が過ぎ、これから先、震災を伝えていくには想像力が鍵を握る。被災地を訪れ、被災者に聞き、そこにはどのような街並みがあるか、どのような暮らしがあったかの想像で思いを寄せて伝えていくべきではないか。気負う必要はないが、若い力が結びつきリレーされていくことが伝承の力になっていく。

■助言者から

命考える大きな「教材」

七ヶ浜町向洋中教諭 瀬成田実さん(60)



震災後に七ヶ浜町向洋中に赴任し、生徒が震災と向き合う学習活動を指導した。最初の学年が現在の高校1年生。卒業後も自分なりに考えて地域のために活動する姿に成長を感じる。

今回のむすび塾で高校生は自分たちの活動と想いを語った。津波で家族を亡くし、伝承に関わる生徒は「震災と一生向き合っていく」と覚悟を述べた。被災地で植樹などを続ける生徒は「震災が自分たちでできることを気付かせてくれた」と打ち明けた。「目標が見つかった」という生徒は教師になって被災と命の尊さを子どもに伝えたいと訴えた。

震災は多くの不幸をもたらしたが、命、家族、友、地域を考える大きな「教材」でもある。被災体験は違っても、高校生が学んだことを伝えることが重要。若者の力で震災に向き合い、語り継ぐために行動を。生徒同士で交流し、できることから始めてほしい。

東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災の教訓や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室(022(211)1509)。